

ペテロ第一1章1-12節 「栄えに満ちた資産」

1A 寄留している選ばれた者 1-2

2A 生ける望み 3-5

3A 金より尊い試練 6-9

4A 預言者も尋ねていた救い 10-12

本文

ペテロへの手紙第一です。私たちの平日における聖書の学びでは、「キリスト教の迫害」について理解を深めています。皇帝ネロによる初めてのローマによる大規模な迫害がありました。それが紀元 64 年から 67 年です。その時にパウロがテモテへの手紙第二を書き、彼が間もなくしてネロから死刑判決を受けるということを学びました。そして黙示録を今、学んでいます。使徒ヨハネがこれを書いたのは、自ら流刑の罪でパトモス島にいた時です。紀元 95 年に始まった、皇帝ドミティアヌスによる迫害で、やはり迫害下にいるキリスト者を励ましました。私たちの望みはどこにあるのか、それはパウロであれば、「終わりの日に用意されている義の冠」でありました。そして黙示録であれば、勝利する者に与えられる命の冠であったり、いのちの木の実であったり、天のエルサレムについての約束だったのです。ですから、この世からの迫害の中で、彼らが信じ、期待し、希望を持っていたのは、この地上のことではなく、天であり、主ご自身に顔と顔を合わせて見えることでありました。

ペテロの書いた手紙も、そうです。第一の手紙の背景は、迫害です。ネロによって行われた迫害は、ローマ市内におけるものが中心でしたが、しかしそれが少しずつ、他の地域へと広がって行っていました。そして、その時にパウロは既に投獄され、彼は殉教する可能性が高まっていました。ペテロはその状況を知っていたのでしょうか、彼の手紙の送り先は、パウロが開拓した小アジア、今のトルコにある教会の人々に対してであります。ちょうどパウロが、異邦人への使徒と呼ばれていたけれども、ユダヤ人の会堂で伝道したように、ペテロはユダヤ人への使徒と呼ばれながらも、異邦人の多くいる教会に対しても働きかけをしていました。また、ペテロはパウロを兄弟と呼び、交わりをして、決して彼の宣教の働きが別物だと思わず、一つの大きなキリストの体の一部として、パウロの宣教の働きの続きを、補っていったことは考えられます。(ガラテヤ人への手紙 2:7-9)パウロが殉教したのは、67 年もしくは 68 年とされていますが、その前後でこの手紙を書いたのではないかとされています。そしてペテロ自身も、第二の手紙で殉教が間近であることを示唆しながら書いています。

書いているのは、バビロンともローマとも言われています。手紙の終わりで、「バビロンにいる、あなたがたとともに選ばれた婦人がよろしくと言っています。(5:13)」とありますが、これは別のギ

リシヤ語の写本では、「バビロンにある教会」となっています。このバビロンが字義的にそうであるという意見があります。そこには、バビロン捕囚以後、定住しているユダヤ人共同体があり、そこにも福音をペテロが伝えにいった、という意見です。けれども、黙示録 18 章がそうであるように、これは靈的に大淫婦と呼ばれている大きな都、バビロンのことであり、それはローマであるという意見です。私はどちらが正しいか分かりませんが、大事なのは、この手紙をパウロの宣教旅行で同伴していたシラスに託していることです(5:12)。シラスがそこにいるということは、パウロの収監と関わっているからであり、私はやや、ローマのことを指しているのではないかと感じます。

私たちが、自由で豊かであると言われる日本に生きていながら、しかし靈的な圧迫が、とてつもないものがあることを、これまでずっと教会の中で学んでいます。イエスが私の主であられ、私の主だけでなく、すべての主であられるという真理を、とてつもない圧力で押しつぶす悪魔の策略があります。私たちはローマ時代の彼らのように、火あぶりになることはないかもしれませんが、心の中では彼らの献身に倣って、キリストを主とあがめて、本気でこの方にあって生きていく覚悟が必要だということです。そこでペテロは、この世を信頼し、希望を置くのではなく、神にこそあるのだということです。「1:21 あなたがたは、死者の中からこのキリストをよみがえらせて彼に栄光を与えられた神を、キリストによって信じる人々です。このようにして、あなたがたの信仰と希望は神にかかっているのです。」

1A 寄留している選ばれた者 1-2

1 イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤに散って寄留している、選ばれた人々、すなわち、2 父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。どうか、恵みと平安が、あなたがたの上にますます豊かにされますように。

「イエス・キリストの使徒ペテロから」という書き出しです。私たちは、教会への手紙の多くがパウロによるものを読んでいきますので、少し違いを見いだします。それは、パウロが、「神のみこころによってキリスト・イエスの使徒として召されたパウロ(1コリント 1:1)」と言って、神の御心によるものだとして強調しているのに対して、ペテロにはそれが無いことです。それは、ペテロが使徒であることについての疑いは、教会の中において無かったからと言えます。ペテロは、イエス様ご自身から教会の指導者として立てられると語られた人物です。「マタイ書 16:18 ではわたしもあなたに言いません。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。」私たちは、カトリックの言うようにペテロの上に教会が建てられたとは信じていません。ペテロが、イエス様を「生ける神の御子キリスト」であると告白した、その信仰告白こそが岩であり、その上にイエス様が教会を建てられていると信じています。けれども、使徒の働きを読めば確かに、ペテロが教会において指導者としての務めを果たしていたことは知っています。

そして、手紙を受け取ったのが、「ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤ」にいる人々です。これが先ほど話した、小アジアの地域です。地図で見ると、北にあるポントから時計回りでこの手紙が回覧されていたのではないかと、思われます。パウロの手紙の多くが、具体的な個々の教会に対して宛てたものであるのに対して、広くキリスト者に対して宛てられた手紙なので、「共同書簡」とも言われます。



そしてペテロは、「散って寄留している、選ばれた人々」と言っています。これは、極めてユダヤ的な言い方です。散って寄留している、というのは、「ディアスポラ(離散)」であり、ユダヤ人たちがイスラエルまた都エルサレムから諸外国によって、捕え移されて、その結果として散って寄留している時に使っています。私たちは旧約聖書を礼拝で学んでいるので、よく分かりますね。主がアブラハムに対して約束の地を与えられたのに、彼らが神に背いたので、神がエルサレムから彼らを引き抜かれました。そしてその散らされた地において神は真実にご自分を求める民を残し、その残りの民を主がエルサレムに帰してくださる、という約束を持っています。

そして、五旬節の時に聖霊が弟子たちに降った時に、この地域から来たユダヤ人たちもエルサレムに集まっていました。「使徒 2:9-11 私たちは、パルテヤ人、メジヤ人、エラム人、またメソポタミア、ユダヤ、カパドキヤ、ポントとアジヤ、フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者たち、また滞在中のローマ人たちで、ユダヤ人もいれば改宗者もいる。」こうした人々が主の弟子となった後、自分たちのところに戻っていったということは十分に考えられます。ですからパウロが福音を語っていた時に、全く新しく聞いたことではなく、そうした人々によって噂として伝わっていたとか、していたかもしれません。

しかし、「散って寄留している、選ばれた人々」と真実な意味で言うことのできる人々は、血縁的に離散しているユダヤ人であることだけでは不十分で、神を信じている信仰によるのだということをもヘブル書の著者は語りました。約束の地にいたアブラハム、イサク、ヤコブでさえ、彼らはそこを所有の地としておらず、むしろ天の故郷に憧れていたと言っています。「ヘブル 11:13-16 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、

はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会があったでしょう。しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。」

ですからここで、ペテロはユダヤ人の信者に対してだけでなく、異邦人の信者に対しても、信仰によってアブラハムの子孫になった者たちとして、「寄留者なのだ」ということで話していると思います。2章11節では、「旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。」と勧めています。あなたがたの故郷は、パウロがピリピ書で語ったように天であり、あなたがたは地上においては、アブラハムと同じように寄留者なのだよ、ということです。私たちが、キリスト者としてこの世において圧迫や迫害を受けている中で、強烈に抱かなければいけない情熱は、天に対する憧れであります。もちろん、私たちは贖われるこの世界を後に受け継ぐことになります。ですから、この地上で神に任されたことに忠実になり、任されたものを管理していくことは必要です。しかし、この地に私たちは属していません。聖なる祭司として、執り成し、同情する所であったとしても、属している所ではないのです。そしてもう一つ、寄留しているということは、「ここは一時的なのだ」ということです。「4:2 こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。」ペテロは、私たちがこの地上にいる時は長いことはない、一時的なのだと言っています。永遠の御国に比べれば、ここはごくわずかな日数でありますし、また迫害を受け、ある人たちは殉教もするかもしれません。ですから、僅かなところなのだ、という信仰であります。この二つの意味が、「散らされた寄留者」の中に含まれています。

そして使徒ヨハネは、福音書で、異邦人の信者たちも神の国に集められることを説明しました。「11:51-52 ところで、このことは彼が自分から言ったのではなくて、その年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。」世界中にいる神の子たちが、一つ所、すなわち天のエルサレムに集められます。

そして、「選ばれた人々」ということについて、次のように説明しています。「父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。」選ばれたということも、極めてユダヤ的な表現です。イスラエル人たちが、神の憐れみによって選ばれた民とされたことを聖書は教えています。「申命記 7:6 あなたは、あなたの神、主の聖なる民だからである。あなたの神、主は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。」地上には、数々の国々があり、民がいます。その中から、神ご自身の所有となるために、つまり聖なる民となるために、選び別たってくださいました。申命記

には、この後に彼らが選ばれたのは、神が彼らを恋い慕っているからであり、彼らが強いからではなく、むしろ数が少なく弱い時に選ばれた、と言われます。そしてペテロは、ユダヤ人の信者に対しては、「主イエスに従っている者たちこそが、真実な意味での選びの民なのだ。」ということ伝え、また異邦人の信者に対しては、「神の憐れみのゆえに、異邦人の中からもあなた方を選ばれた。」と言っているのです。私たちは、他の人々とは全く異なるのだ、神によって選ばれ、召しを受け、聖め別たれたのだという意識と認識が必ず必要ですね。東京の在日米大使館の大使が、自分が決して日本国の国民として生きている意識がないように、私たちも決して他の人たちと同じではないのです。

初めに、「父なる神の予知に従い」とあります。パウロはローマ 11 章 2 節で、「神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません。」と言ったように、神はご自分の計画をお持ちで、それに基づいてイスラエル人をご自分の民として選ばれました。そして、キリスト者に対しては、「神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じかたちにあらかじめ定められたからです。(ローマ 8:29)」と話しました。ですから、私たちがキリスト者になったということは、神にとって驚きでは全くなく、永遠の昔からのご計画に従ったことなのだよ、ということでもあります。

そして、「御霊の聖めによって」選ばれています。神に選ばれ、聖なる者とされる時に、私たちのできることは何一つありません。信仰によって応答するのですが、私たちが聖なる者となることは決してできません。聖霊がしてくださることです。「テトス 3:3-6 私たちも以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快樂の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。」

そして御霊の聖めを受ければ、「イエス・キリストに従う」ようになるということは、とても大事です。キリスト者になることが、何も生活に影響を与えていない、変えられていないということは、あり得ません。もしそうであれば、その人には聖霊が与えられていないということになります。この御霊の聖めについても、旧約時代に預言者エゼキエルを通して主が約束しておられたことです。「36:26-27 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。」御霊が与えられるということは、心が洗われることであり、神の愛が注がれることであり、その愛に応答して心からイエス・キリストに従えるようにすることでもあります。

そして、「その血の注ぎかけを受けるように選ばれた」とあります。これはこの前の聖日礼拝において、ルー・ウィングさんが語ってくださったことです。血を注ぎかけるという行為は、モーセがイスラエルの民に対して、契約を結ばせる時に、雄牛を祭壇にいけにえとして捧げ、それからその血の半分を民に注ぎかけたところから始まります。しかし今は動物の血ではなく、御子ご自身、キリストの血によって聖め別たれたのです。この血によって、私たちは良心が聖められ、それで正しい心で主に従えるようになります。「ヘブル 9:13-14 もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きをして肉体をきよいものにするにすれば、まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におさげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするのでしょうか。」

そして、「どうか、恵みと平安が、あなたがたの上にもますます豊かにされますように。」と書いています。恵みは、ギリシヤ人の挨拶で、「カリス」であります。そして平安は、ヘブル人の挨拶で「シャローム」です。この二つを合わせることによって、二者がキリストにあって一つになったことを示します。また順番が大事です。神の恵みが豊かに与えられ、それによって神の平安と豊かさにあずかることができるということです。ペテロは、「ますます豊かにされ」と書いています。これまでも豊かに与えられていたけれども、これまでもますます豊かにされますように、ということです。もう受けているのだから、ではないのです。

2A 生ける望み 3-5

3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。

ペテロは、父なる神への賛美で溢れています。その賛美は、主が私たちが救ってくださった、ということに基づいています。私たちが困難に耐える力はどこから来るのか？罪人である私を、キリストが救ってくださった、という神の憐れみを知っているかどうかにかかっています。そして、「ご自分の大きなあわれみのゆえに」と書いていますが、私たちが罪の中で死んでいて、神の裁きを受けるのは当然の身であります。それを父なる神が大きな憐れみのゆえに、救ってくださったのです。「エペソ 2:4-5 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちがキリストとともに生かし、..あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです..」

そして、「イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ」と書いています。イエス様が十字架の上で、私たちの罪のために死なれた時に私たちも、その古い人が死にました。そして共に葬られ、そして神がキリストを甦らせた時に、私たちにも新しい命を与えられました。私たちは信仰を持つことによって、この新しい誕生を経験するのですが、それ

はキリストが死者の中から甦られたその復活の命に基づいています。罪の中に死んでいたのに、キリストと共に甦ったのです。このことを知るのは、とても大事です。私たちが神から生まれた者であることを知ることは、この世において激しい霊の戦いがあっても、それでも生きることができるようにしてくださっています。「1ヨハネ 5:18 神によって生まれた者はだれも罪の中に生きないことを、私たちは知っています。神から生まれた方が彼を守ってくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです。」新しく生まれた者として、どう地上で生きるべきか、ということをペテロはこの手紙で話し続けます。

そしてキリストの復活は、「生ける望み」を持たせます。つまり、虚しい望みではないということ。事実、イエス様が墓から甦られたのです。これは、哲学でもなく、価値観でもなく、考えでもなく、ましてや心の中の心理的状态でもなく、紛れもない事実なのです。この歴史的事実に基づいて、私たちは実質的な望みを抱いているのだということであります。私たちは黙示録で、スミルナにある教会に対するイエス様の言葉を読みましたね。イエス様は、殉教しなければいけない彼らに対して、「死んで、また生きた方が言われる」とご自身を現してくださり、そして「あなたにいのちの冠を与えよう。」と約束されました(2:9,10)。

4 また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。

そうです、天の望みが私たちに与えられており、それは虚しい望みではなく、生ける望みであります。近年のキリスト教において流行しているのが、「神は天に私たちを引き上げるのではなく、この世に降りてきてくださる。」というものです。今の世を天と同じように変えてくださるのだから、私たちはその贖いの働きに今、加わるのだよ、ということです。天国を待っているだけの存在ではないのだ、ということです。もちろん、私たちは神の国の市民として、この地上において証しを建てます。2章には、祭司の王国になっているとあります。私たちはこの地上と天の間にある距離を、キリストにあって仲介する、執り成し手になっています。平和がないところに和解を、妬みのあるところに敬意をもたらします。しかし、天に望みを置くことこそが私たちを支えるのです。

戦国時代と江戸時代初期のキリシタンに対する大迫害の記録には、「パライソ」という言葉が数多く出てきます。それは、まさにパラダイス、天の御国ことです。彼らがあれだけの恐ろしい、悍ましい迫害を耐えることができたのは、その苦しみの後に天の栄光が近づいていると固く信じていたに他なりません。幼いキリシタンの証言には、とてつもないものがあります。自分たちが死ぬことが近づけば近づくほど、刀が自分の首に振り下ろされる直前に、その瞬間が近づけば近づくほど、その子の顔は満面の笑みに包まれました。「パライソ」と唱えていたのです。まさに、ペテロが第一の手紙で話していることを実践していました。

ここにあるように、天というのは「消えて行く」ものではありません。私たちは心の中で、天の望みを抱いているのですが、この世からは「それは心の中に生きているものだ」として、実体のないものにします。いいえ、実体のないのは「この世界はいつまでも続く」と信じているほうであり、この世のありさまは過ぎ去るのです。興味深かったのは、以前、ある精神科のお医者さんの言葉でした、患者の中にクリスチャンがいるそうですが、その人たちの姿を見ると、「救いを与えるのは、医者ではない。」と分かるのだそうです。他の若い医者はそれに反発したそうですが、彼は精神的病を超えたところにある魂の救いを見ていたのでしょう。そして、「朽ちる」ものでもありません。金というのは、耐久性に優れたものであり、たとえ死海のような濃度の高い塩分に触れても錆びることはありません。それでも、金も朽ちていくものです。イエス様が言われました、「自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。(マタイ 6:20)」そして、「汚れること」もありません。私たちの世界は、どんなに純粋と言えども、そこには汚れがあります。それが一切ないのです。

5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。

ここの「守られている」という言葉は、戦争において、町の中にある要塞で守られている、という意味があります。ピリピ書における、思い煩いに対する神への祈りでも約束が書いてありますが、同じ言葉が使われています。「4:6-7 何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」どんなに敵からの激しい砲撃があっても守られている、ということです。

それは、何よりも「神の御力」によって守られています。自分の信心深さによって、天にある資産を守っているのではなく、神の御力によって、私たちの信仰も保たれ、健全でいることができます。そしてその御力は、「信仰」を通して表れます。信仰は、非常に重要な要素です。天における資産も、新たに生まれたことも、イエス・キリストの死者からの復活も、みな信仰によって、それを実質化させていることができます。「ヘブル 11:6 信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。」神のみことばへの信仰がなければ、すべてが崩壊してしまいます。けれども、それだけではありません。

そして、「終わりのときに現わされるように用意されている救い」というのは、主イエス・キリストの再臨です。主が空中にまで来られることによって、私たちのからだも贖われます。また、主が地上に再臨してくださることによって、この世界の贖いが完成します。ペテロは手紙の中で、終わりがあり、主イエス・キリストの現われがあり、それが接近していることを前提にして、この手紙を書

いています。主の現われを思いながら、日々を生きていくように促しています。ですから、私たちが迫害や試練、困難を生きていくその力は、終わりの時に生きることです。

3A 金より尊い試練 6-9

6 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいますが、いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが、7 信仰の試練は、火を通して精練されてもお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と栄光と栄誉に至るものであることがわかります。

天に召されること、そこにある神の栄光を思えば、「大いに喜」びます。信仰をもって神に近づけば、私たちの心は聖霊によって栄光の喜びに満たされます。「ローマ 5:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」

その喜びの中で、試練による悲しみを耐え忍ぶのです。「いまは、しばらくの間」と言っていますね。先ほどの、寄留者という立ち位置であります。ここにいるのは、しばらくの間だけです。そして試練や迫害を受けている時はこの思いはとても大事です。黙示録2章のスミルナの教会の人々にも、牢屋に入れられる期間が十日であると主が言われて、試練が長く続かないこと、終わりがあることを告げられました。そして、試練によって、私たちの信仰にまわりついている、不純物が取り除かれることです。「火を通して精練されてもお朽ちて行く金よりも尊いのであって」とペテロは言っています。金が火に通されるときに、かな粕が出てきます。同じように、私たちのうちや回りにこびりついている不純物が、試練によってきれいに取り除かれるのです。ヤコブの手紙では、「試練にあうときは、大いに喜びなさい。」と勧められました。教会が力強いのは、迫害を受ければ受けるほど、キリストの苦難とその後の栄光にあずかっている者たちとして、ますますその真価が現われるのです。清められるのです。

そして、その精練された信仰によって、主が現われてくださったときに、大いなる栄光と栄光を受け取ることになります。天において、大歓声があることを黙示録 19 章は書いています。天に大歓声が起こり、「ハレルヤ。救い、栄光、力はわれらの神のもの。」と叫んでいます。それは、聖徒たちを踏みつぶしていたバビロンが倒れたからです。試練を通して耐え抜かれた信仰は、このように大きな称賛と栄光と栄誉に至ります。

8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。9 これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

ペテロは、イエス様を肉眼で目撃しました。けれども、ペテロが喜んでいるのと同じように、信仰者は見てもいないのに喜んでいます。そして見てもいないのに、この方を愛しています。そして、これは知識でもなく、知的な理解でもなく、「ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています」とあります。先ほどから、ペテロは否定形を使用していることに注目してください。「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない」と言っていますね。こちらでも、「ことばに尽くすことのできない」ということです。天にある栄光は、比べることのできないものであり、その喜びと栄えは上限というものがありません。ですから、この地上にあるものとは違うのだ、という否定によってしか表現することができないのです。

そしてなぜ、そんなに喜んでいただけるのか？「栄えに満ちた喜びにおどって」いることができるのか？それは、「信仰の結果である、たましいの救いを得ている」ということです。信仰によって、確かに魂の救いを得ています。私たちが罪を犯せば心が悲しみます。それはとりもなおさず、イエス様の心を痛めてしまったということ、そして、「救いの喜びに傷を与えた」からに他なりません。ダビデが罪を犯した後に、「あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。(詩篇 51:13)」と言っています。しかし、御子の血の注ぎを受けて、神との交わりを保っている時に、私たちの喜びは全きものとなっています。(1ヨハネ 1章)

4A 預言者も尋ねていた救い 10-12

10 この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。11 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。12 彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはつきり見たいと願っていることなのです。

ペテロは、ユダヤ人への使徒らしく旧約時代の預言者たちのことを話しています。彼らのうちにキリストの御霊がおられたとありますが、旧約聖書には、キリストについての預言がたくさん、書かれています。けれども、預言者たち自身は、自分が語っていたことについて、それが本当にはどのような意味なのか、理解できないままでした。例えば、ダニエルは最後の大きいなる戦についての幻が与えられた時に、ダニエルは御使いに尋ねました、すると彼はこう言いました。「12:4 ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと探り回ろう。」ですから自分たちの時代のことではなく、将来のこと、私たちの時代の事であるとの啓示を受けていたのです。そしてその来るべき時のために、自分たちは奉仕していることを知ったのです。預言者イザヤも、調べたことでしょう。「キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされた」とありますが、彼は、キリストの苦難を 53 章で預言しています。そして、その苦

しみの後に復活して、栄光を受けている姿も見ます(10 節以降)。そして、11 章など至るところに、栄光と力を帯びて輝いておられる世界の国々の主権者、王として君臨しておられるキリストの姿を預言しました。

そして興味深いことですが、「御使いたちもはっきり見たいと願っていること」とあります。イエス様に付いてきている弟子たちに、預言者たちも義人も知ることができないことを、あなたがたは聞いているよ、と言われました。「マタイ 13:16-17 しかし、あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。まことに、あなたがたに告げます。多くの預言者や義人たちが、あなたがたの目で見たいものを見たいと、切に願ったのに見られず、あなたがたの聞いていることを聞きたいと、切に願ったのに聞けなかったのです。」そして、福音書には数多くの箇所、御使いの活動が記録されています。イエス様がお生まれになることを、ガブリエルが伝えました。イエス様が誘惑を受けられた後に御使いが仕えていました。イエス様がゲッセマネで血のしたたる祈りを捧げられた時に、御使いが助けていました。そして復活された時にも、御使いが大地震を起こしていました。それだけでなく、使徒たちが福音を伝えている時も、例えばペテロが牢屋につながれている時に、御使いがその鎖を解きました。このようにして、御使いたちもはっきりと見たいと願っていることが、それが私たちに与えられた福音なのです。

けれども、使徒たちには「天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。」とあるように、与えられたのです。エペソ人への手紙で、パウロがこのことを話しています。「エペソ 3:5 この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。」

私たちは、とても小さき者たちです。弱く、力がなく、弟子たちと同じように失敗をします。けれども、これだけの恵みを注がれている者たちであります。そして、神はこのような小さき者たちからかえって、ご自分の恵みを現したいと願われています。